

洪水史から学ぶ：「未（ひつじ）満水」（1715年）を題材に

飯田市美術博物館専門研究員
青木隆幸氏

はじめに

今、紹介いただきました青木です。よろしくお願ひします。

喬木村の出身です。県外の大学を卒業し、長野県の公立高校の社会科の教師になりました。県下の高校をまわり、20年ほど前に一度飯田に戻り、数年、飯田高校に勤めました。そのあと千曲市にある長野県立歴史館に8年勤務、退職とともにこちらに帰ってきました。

先ほどの紹介の中に飯田市美術博物館の話がありました。皆さんが眠くならないうちに宣伝しますと、美博では今、三六災害の展示を行っています。自然展示室では三六災害を、私が担当する文化展示室では「未満水」と、民俗学の研究成果を展示しています。7月11日に講座を行うことになっているのですが、最初は11日午後、定員50人で募集したのがすぐ満員になり、午前にも50人設定でもう一度行うことにしました。ところがそれも満員。23日にもう1回設定しました。同じ内容の講座を3回やるというのは美博でもめったにないことらしいです。関心が高いですね。

今回の美博の展示で私に課せられたテーマは、「三六災害」を考える手がかりを探る目的で300年前の洪水を調査するということでした。「未満水」といいます。最大の被災地が高森です。非常に狭い範囲に、短時間に激しい雨が降り、壊滅的なダメージを与えた災害です。

1 「一度あることはかならず二度ある」

私が洪水史に関心をもつようになったきっかけは、県立歴史館で「戌（いぬ）の満水」を取り上げた展示を担当したことからです。10年ほど前のことです。

「戌の満水」は、江戸時代中期の1742年（寛保2年）に千曲川流域で起こった大洪水です。流域各地に残る古文書を読むというのが私の主な仕事でした。

ところで、調査をはじめてすぐ気づいたことがありました。最初にこのお話をしましょう。

調査に伺うと、いろいろな人からこう言われたのです。

「青木さんは洪水の研究をやっているのですね。なら、ダム賛成派ですか、脱ダム派ですか」という質問です。

みなさんお分かりのように、長野県ではある知事の時に「脱ダム宣言」が出されました。その影響で、洪水の研究をやっていると、「ダムの有無」についての意見を求められるわけです。まして私が勤務していたのは県立の施設ですから、県の考え方が展示に反映するのではと思われたのでしょう。あちらこちらでダム問題についての質問をうけました

私は完全な文系人間なので、「ダムを作った方がいいのか、作らない方がいいのか」なんてことはよく

分かりません。そんなわけで、質問を受ける度に、だんだん研究を進めることが嫌になっていきました。「ダム派か脱ダム派かをはっきり言えない限り、研究をしてはいけないのではないか」、そんな気持ちになってきました。

気持ちが吹っ切れたのは、一人の地質学の先生と話をしたことでした。「ダム問題を引きずって研究がつまらない」というような気持ちをぶつけたら、その方がこう言いました。

「青木さんね、一度あったことは必ず二度ある。それが歴史です。『ダム賛成か脱ダムか』じゃなく、『その時、何が起こったのか』を出来る限り正確に明らかにする、それがとても大切なことだと思います。青木さんの出来る範囲で史実を明らかにする。それだけで研究の意味は十分あると思います。それを使って誰か別の方がもっと違った研究をすればよいわけですから。」

災害研究では、「具体的に今、何をやるか」という提案型の研究も大切です。けれども、「一度あることは必ず二度ある、あるいは三度ある。何が起こったのかを明らかにすることで、後世への適切な教訓を引き出すことができる」という観点で災害史を掘り起こすことも大切な基礎研究なのですね。

「ああそうか、自分が今やるべきことはこれでいいのだ」ということに気づき、肩の力が抜け、研究を再開しようという気持ちになりました。

2 全体は部分の総和ではない

「戌の満水」というのは千曲川全体を襲った大洪水なので、まず、千曲川流域の市町村の歴史を一つずつ調べることにしました。それぞれの自治体が刊行している歴史書（市史・町史・村史など）から「戌の満水」に関する記述を拾い出す作業です。それらを集め、上流から下流に向かって並べていけば大洪水の全体像が分かると考えたわけです。

どの地域の歴史書も、みなよく書けています。「何人亡くなった、どこの堤防が決壊した」など、しっかり書いてあります。

ただ、こうした作業を続けているうちに、ふっと気づきました。

「そもそも、なぜこんな大災害が起こったのか」ということが書いてないのですね。

各自治体の被害の様子、つまりミクロな情報はよくわかるのですが、災害を引き起こした要因（気象条件等）、つまりマクロな情報の記述がないのです。

ですから、各地の歴史書をいくら丁寧に並べてみても、災害の全体像は見えてこないのです。

ジグソーパズルというゲームを思い出してください。一個一個小さなピースを適切な場所に置いていって、大きな絵を完成させるゲームですが、あらかじめ完成図、つまり全体像が分かっているから作業が始められるのです。どのような絵になるか皆目分からない人がピースを置くことはできません。

小さな部分をどんなにしっかり調べてみても、全体を見る大きな目がないと災害の実相は描ききれませんし、実相が描けないということは、これからの社会に対する教訓を引き出すこともできないということになります。単純に部分を総和すれば全体が見えてくるわけではありません。

「マクロな視点」という言葉はちょっとたいそうな言い方かもしれませんが、災害研究のさいには、そういう大きな視野が必要だと痛感しました。

3 語られた「未満水」

そこで、「未満水」研究でも、大きな視点で災害をとらえ、その上で細部を掘り下げていくという手法

を採りました。

「未満水」は正徳5（1715）年の旧暦6月、天竜川流域で発生した大洪水です。「戌の満水」とならば非常に大きな災害だったと語り継がれています。

災害を記録した史料、あるいは記録した人々の言葉に耳を傾けながら、今から300年前に何が起こったかを復元していく、出来るだけ正確に復元していく、そんな作業をしていきたいと考えました。

ところが、調査をはじめてみてわかったことは、「戌の満水」研究とはあまりにも状況が違っているということでした。「未満水」に関しては、「当時の人々の声」、つまり史料が全然ないのです。当時の記録があまりにも少ないのです。

「戌の満水」では、史料がそれなりに残っています。それらを集めてうまく処理していけばある程度洪水の全体像を復元することができました。

ところが、「未満水」というのは、ほとんどまったく史料が残されていないわけです。

という訳で、高森町歴史民俗資料館から講座依頼を受けた時、「未満水」で喋ることは無理」と思い、お茶を濁して「洪水史」という題名をつけました。それから2か月ぐらい経ち、今は一応「未満水」について多少は喋れるかなという気持ちになってはいますが、やはり大変難しいテーマです。今日は、曖昧なお話で、退屈な時間になるかと思いますが、ご容赦下さい。

まず、「未満水」の定説と言われるものを紹介しましょう。2ページの資料1をご覧ください。『長野県史』の記述です。

「正徳5年（1715）未年の6月に天竜川水系を襲った「未満水」は、昭和36年6月の三六水害とならんで、天竜川の二大洪水として語り伝えられている。両者はともに梅雨前線による集中豪雨が原因である。「未満水」ではとくに、上伊那南部から南の天竜川と、その右岸の水系に被害が大きかった。木曾川の辺りにも被害が出ている」と書かれています。

さらに『長野県史』は、山吹藩の被害、野底川の土石流、川路地区の様子（「諏訪湖を見るように水がついた」）などを紹介しています。

これらの記述と、村史や町史を参考に、「未満水」の被害を地図に落とししたのが3ページです。

4 一次史料を探し出す

災害史を研究する上で、「これは気をつけないといけないな」と思ったことがあります。

「今、自分が読んでいる史料は、災害発生時、あるいはそれに近い時期に書かれたもの（一次史料）か、後世誰かが様々な史料を使って書いたもの（二次史料）か」という点です。

ちょっと言葉は難しいのですが、一次史料か二次史料かということには、細心の注意をはらわなければいけません。

もちろん、その時に現場で書いた記録だからすべて正しいことが書いてあると言い切ることはできません。言い伝えを後にまとめたものだから全部でたらめともいえません。

ただ、自分で見聞したことをその場で書くよりも、伝聞や、後の記憶を参照しながら書く方が、誤りが多くなるのは当然です。頭の中でいろいろな情報を組み立て直していくという作業が行われるわけですから、さまざまな「ノイズ」（雑音）が混入してきます。また、情報の取捨選択も行われます。

皆さんも、思い出を語る時、語っていくうちにだんだん〈物語〉が作りあげられていくという経験をされたことがあるはずです。「過ぎてしまえば、みないい思い出」という言葉もあります。実際には見て

いなかった光景を、見ていたかのように錯覚することも起こります。「過去は作られる」のです。

伝言ゲームのおもしろさはまさにそこです。多数の人が介在するうちに、最初流した伝言が思いもしない内容に変わるところです。

出来事を記録する文書（史料）も、出来事から時間や場所が隔たるに従い、いろいろな人の情報が混じって行って、史実と大幅に異なるものに変わる可能性があります。

個人の「過去」と同様、災害も伝えられていく中で、作られていくのですね。

このことは最近の災害の事例にも当てはまります。今から2年ほど前に千曲川で大氾濫が起きました。2019年の台風第19号です。千曲川下流の長野盆地の長沼という所では新幹線の車庫が水に浸かりました。そこで、多くの方々が、この台風は長野盆地に甚大な被害を与えた台風だと記憶しています。

ところが実際には、千曲川の上流でも大きな被害が出ています。

なぜ、上流のことがほとんど知られていないのか。情報を伝えるマスコミが情報を取捨選択し、〈災害の物語〉を作りあげてしまったからです。マスコミにとっては、新幹線が水に浸かっている写真は、インパクトが大きく、流行言葉でいえば「インスタ映え」します。視聴率を上げる効果があります。誤解を招く言い方ですが、これに比べ、上流の被害は「地味」で、人々が飛びつきません。

新聞やテレビ、ネットは、連日、長野盆地の被害を伝えました。その結果、「台風19号被害は千曲川の長野盆地付近で発生した」というイメージが作り上げられてしまいました。まさに、「災害は作られた」のです。

作られた災害のイメージを出来るだけ削ぎ落としていくために、一次史料にこだわる姿勢がなにより大切だと思います。

というわけで、ちょっと格好よく言うと、今回は、後に作られた編纂物をまずいったんは疑ってみるという作業から始めました。「できるだけその時に書かれたものに近づいていく」という姿勢を心がけました。

5 「野底川大土石流」はあったのか

たとえば、2ページの資料2を見てください。これは今回の研究のスタートになった文献です。昭和35年に作られた『野底山史』です。典型的な二次史料ですが、「野底川大土石流」が生々しく書かれていますので、まず、この記述が史実かどうか確かめてみようと思いました。

野底川大土石流は、「未満水」でもっともよく知られている出来事の一つです。高森町歴史民俗資料館で掲示されている「未満水」のパネルを拝見しましたが、一番メインのパネルはやはり野底川大土石流です。「未満水」＝野底川というくらいに有名な出来事として語り継がれてきました。『野底山史』によれば次のような出来事です。

「飯田世代記」という本によると、正徳5年の6月17日から降り出した雨は、20日になって晴れ上がった。そして、老人も子供も家に残したままお百姓さんは野原へ出て行って野良仕事を始めた。そうしたら天気は非常にいいのだけれども突然大音響がして、土石流が起こった。大変な土石流だった」。

情報の流れを整理しましょう。

野底川で大土石流が起こったという話が「飯田世代記」という本に書かれていて、その記述を昭和35年に作られた『野底山史』が引用しているわけです。

ということは、情報ソースは「飯田世代記」ということになります。まず、この本に辿り着かなけれ

ばなりません。

この本は飯田市立図書館にありました。しかし、あるにはあるのですが、実はコピーです。本物（原本）はないのです。

実は、「飯田世代記」という本はよく分からない本でして、本物がどこにあり、いつ誰が書いたものかということが、はっきりしないのです。図書館所蔵のコピーの出所、入手のいきさつもわかりません。

この地域の歴史研究に大きな業績を残した村沢武夫さんも、「（「飯田世代記」は）原本も作者も成立年代も不明」と述べています。

もっと不思議なことがあります。

とりあえず図書館で「飯田世代記」のコピーのコピーを入手し、『野底山史』が引用する野底川大土石流の記述をさがしたのですが、どこにもそんな記述がないのです。「土石流の話はこの本から引用した」というのに、その本に該当する記述がない。そんなことがあるのでしょうか。

『野底山史』の執筆者はすでに物故されていると思いますので、いきさつは確かめようがありません。

野底川大土石流という、「未満水」でものすごくよく語られるエピソードは、刑事ドラマ風に言えば、「裏がとれない」のです。

実はこういう類いの、疑問符がつく史料が「未満水」にはたくさんあります。そのことは後にお話します。

ただ、みなさんご存じの天王原の夜泣き石伝説や、お練り祭の起源譚は、すべて野底山大土石流の存在が大前提です（『野底山史』参照のこと）。土石流がなかったら、これらのエピソードはすべて成り立たなくなります。

飯田藩の場合、「未満水」直後に藩主が大坂で亡くなってしまいました。この混乱でしっかりした記録を残せなかったのかもしれませんが、残っている史料を見る限りは、後に述べる山吹藩と違い、大きな被害が出たようには思えません。大規模な復旧作業をやっている気配もありません。

「野底川大土石流はなかったのではないか」と考えてみる必要はあります。

野底川大土石流の有無を考えていくなかで気づいたことがもう一つあります。「未満水」＝三六災害とならぶか、それ以上の災害」と簡単に言い切ってしまうすぎているのではないかということです。先入観なく、しっかり史料を読んで復元していかなくてはいけないということを強く感じ、一次史料を探し始めました。

探し求めている史料は、当地、つまり高森町にありました。

6 山吹藩主座光寺為勝は見た

「未満水」は1715（正徳5）年ですが、当時の山吹藩藩主だった座光寺為勝という人物が、満水（洪水）の状況を記録していました。「座光寺為勝知行所水害記」（以下、「水害記」といわれる史料です。この史料は『山吹藩史料』に収録され、現在は活字で読むことができます。

ただこれは、為勝が正徳期に書いた「水害記」そのものではなく、『山吹藩史料』という編纂物に収録するためにとりどころ手直しを加えたものです。為勝自身が書いた文書は座光寺家にしっかり保存されていました。翻刻文は『長野県史 近世史料編（南信）』に掲載されています。

ということで、この「水害記」はよく知られていて、いろいろなところに引用されています。ただ、「水害記」の文言を正確に読み取っていないものが多いような印象を受けました。一次史料として貴重

なものですから、しっかり読み込んでみようとしたところが、私の今回の作業のオリジナルな部分です。

4ページをご覧ください。「水害記」を現代語訳したものです。今この場で全部読んでいると日が暮れてしましますが、それでもできるだけ分かりやすい文章にしてありますので、少しだけ読んでみたいと思います。

為勝は山吹藩の陣屋にいて、災害の様子を見聞し、その情報を日々記録していたと思われま

す。雨は正徳5年6月17日の夕刻から降りだしています。18日は、未明から「膝をならべて話す言葉も聞き取れないほど」の豪雨になりました。激しい雨がどのくらいの間続いたかは分かりませんが、天竜川がだんだん増水してきて、未の刻（午後2時ごろ）には東は河野・田村の岸、西は屋敷の所、下平まで一面に水がついて、「諏訪湖を見るよう」でした。「何百年來の満水である」と書いています。

天竜川支川の境之沢は、あまりにも天竜川の水位が上がったので、水が逆流（「バックフロー現象」と呼びます）してきました。田沢川は、未曾有の雨で、突然山津波（土石流）が発生しました。「田沢川で発生した山津波の音は、百千の雷が一度に鳴ったようで、座敷にいても体に響いた」と書いています。為勝が驚いている様子が伝わってきます。「宝永4年の富士山の噴火の時よりも音が大きく、林の中にいた猪も驚いて駆け出してきた」と記しています。

支川の土石流と天竜川の氾濫で浸水した場所（字名）も細かく書かれています。

18日以降、支配所の各地から次々に情報が入ってきます。用水路の被害報告が多いのですが、19日になると、昼ごろまでに天竜川の水位は少し下がりました。

ところが午後3時ごろ、再び水位が上昇に転じ、洪水が発生します。18日夜ほどではないが、かなりの規模の土石流が支流で発生したようです。19日の申の刻（午後4時ころ）になると、お城の下（下平地区）まで水が流れ込んできたようです。天竜川は上流で激しい氾濫になっているらしく、家屋などが流下してきます。中川とか飯島のあたりで大きな被害が出ていることがわかります。家財道具も流れてきています。

街道に目を向けると、すでに18日の段階で、あちらこちらで橋が落ちています。「飯田との往来が途絶え、塩が入ってこなくなり大変だ」と述べています。リアリティがあります。

この「水害記」の史料価値、つまり情報の信憑性を見極めるために、気象の情報に注目してみました。為勝は天気のことを気がかりだったらしく、かなり詳しく記録しているからです。気象情報が豊富なところがこの史料の一つの特色です。

「歴史天候データベース」というアプリがインターネット上で公開されています。「戊の満水」の研究をした時に使ったアプリです。何年何月何日の日本各地の天気はどうだったか、簡単にネットで調べることができます。最新の歴史学研究成果といえます。江戸時代であれば大概の日の天気が分かります。5ページの資料5がそれです。

全国各地に残っている日記とか、ある程度継続的にその土地の天気が書かれている史料を読み込み、データベースにして、検索、表示できるようにしたアプリです。

正徳5年6月の場合、継続した天気の記録として使用できるのは、北は弘前、南は九州の諫早までの間の10地点あまりです。年によってはもっとたくさんの地点で記録が残されていますし、逆に記録の少ない年もあります。

青い丸は雨が降っていることを、赤いのは晴れていることを示しています。丸の大きさが快晴かやや曇っているかを示します。青の丸の大きいのはどしゃぶり、青の丸が小さいのは小降りです。山吹藩の

データはないので、為勝の「水害記」の記述を参考にしました。

「未満水」と呼ばれた災害が発生しているのは、正徳5年6月、新暦で言うと7月のちょうどこの時期（17日～24日）です。全国的に青の丸が多いです。雨が降っているということです。6月ですから梅雨前線の影響ということは容易に想像できます。

データベースと「水害記」と、私の推理を重ねながら当時の天候を推定・復元したのが6ページと7ページです。いわば、データベースの「見える化」です。

左側のところが「歴史天候データベース」で書かれている各地の天気の様子です。伊勢の天候がポイントになると思います。これを見ながら梅雨前線の動きを推理してみましょう。

7 「未満水」、その時何が起こったか

「水害記」では13日から雨が降って16日に一回止んで、17日の夕刻から降り出したと書いてあります。梅雨前線がおそらくこの辺（太平洋沖合付近）にあったと思います。伊勢が大雨ですから、この辺に前線がかかって雨が降り始めたのでしょう。18日の朝から山吹付近が土砂降りですから前線が北上してきたと思われます。そして本州中央、つまり長野県のあたりにずっと停滞する。19日、伊勢は晴れていますから、梅雨前線はさらに北に上がったと考えてみました。

翌日（20日）、また伊勢が激しい降雨です。前線は一旦南下したのでしょう。「水害記」にはこの日の雨について特筆するような記述がないので、前線が南下した分だけ、当地では雨は小降りになったと想像します。

21日を見ましょう。やっぱり前線は太平洋側に停滞している感じです。「水害記」は、21日夜から大雨になった、と書いてあります。前線が北上を始めたと考えられます。22日・23日のことはわかりませんが、為勝は、この間「雨が降らない日はなかった」と書いてありますから、前線は停滞していたでしょう。

24日、伊勢で雨が降っているのに断定は出来ないのですが、東北地方が軒並み晴れています。また、24日以降大雨が降った記録がないので、ここで梅雨明けしたのではないのでしょうか。

無謀とは分かりつつ、正徳5年の6月半ばの空を再現してみました。

9ページでは、梅雨前線の動きをもうすこしわかりやすくまとめてみました。

8 『川路村水防史』と「水害記」

ここで『川路村水防史』という書物を取り上げてみましょう。5ページの資料6です。

「未満水」では必ず取り上げられる基本文献です。昭和11年に刊行されています。その中にこういう記述があります。

「正徳五年六月、天竜川古今未曾有の大洪水なり。六月十七日より雨が降り始め、十八日未明の時刻豪雨となり、その物音、その音響物すごく轟いて」、「白井川、久米川など、川路の近くの支川が一気に土石流を起こした。天竜川はだんだん増水、未の頃には諏訪の湖を見るようだった」。さらに、「何百年に一度の洪水である。家や酒屋が流れてきた。富士山が噴火した音よりもすごかった」とも書かれています。古くからこの文献を使って、川路村付近の「未満水」の被害が語られてきていました。

ところでみなさんの中に、私が今この資料を読んでいるうちに「あれっ」と思われた方はいませんでしたか。「どこかで聞いた話じゃないか」と感じた方はいませんでしたか。

そうなのですね。『川路村水防史』の記述は為勝の「水害記」の文言とそっくりなのです。「18日の未明」、「大音」、「諏訪湖のような湛水」、「数百年来の」、「天竜川の川筋に人家が流れてきた」などなど。為勝の記録でも人家が流れてきたとある。「富士の焼けた音、つまり富士の噴火の音よりも大きな音をたてて発生した土石流」も両書そっくり。「19日のころに水がいくらか引いた」も同様です。

為勝の記録は正徳5年6月、高森周辺で起こったことをその時に記録したものです。『川路村水防史』は川路周辺で起こったことを、正徳5年から220年たった昭和11年に書いたものです。それがここまで似ているというようなことがあるのでしょうか。場所がまったく違います。

それにしても、なぜ『川路村水防史』は「水害記」に酷似しているのか。答えは同書のあとがきにあります。

「私は本書を書くにあたっていろいろな史料を調査した。「山吹藩史料」にも見分記が載せられている。これも読んだ」。(あとがき)

『川路村水防史』を書いた人物は、「水害記」を読んでいたわけです。意識したかしないかはわかりませんが、山吹で起こったことを川路にそのまま当てはめてしまった可能性があります。

『川路村水防史』を「未満水」の基本史料として読むことは、あまりにも危険です。

「未満水」研究にあたっては、「飯田世代記」同様、『川路村水防史』もそのまま史料として使うことができないことになりました。そうなるとますます重要性を持つてくるのが「水害記」なのです。

9 「未満水」の被害地域

ただ、「では「水害記」以外に一次史料はないのか」と言われると、そうではありません。当時幕府領だった中川村地域には、幕府領を管理していた飯島陣屋に提出した史料が残されています。葛島にあった船着き場が流され、船守が2名亡くなったと書いてあります。年貢の減免願いも出されています。

注意してみると、「未満水」に関しては、座光寺、高森から北の地域に信憑性の高い史料が残されています。

そこで、「被害があった」と言われる場所を地図の上に置きながら、その情報が信憑性の高いものか低いものか判断してみました。それが8ページです。

白く丸を打ったところは、今まで「大きな被害が出た」と言われていたところですが、今回の調査で信憑性の高い史料が見つからなかったところです。

たとえば高遠藩。「大きな被害が出ている」と言われてきたのですが、被害届を幕府に出した痕跡がありません。仮に被害があったとしても、それは小規模なものだったということでしょう。

駒ヶ根地域も、天竜川で大きな被害が出ていることを示す史料がありません。野底川や川路は先ほどお話しした通りです。

というわけで、「未満水」という水害をもう一度精査してみると、被災地は中川、飯島、松川、高森あたりです。中田切川から南、片桐松川や小八郎岳、それから山吹藩関係です。このあたりが甚大な被害を受けた地域です。

阿島橋から竜の口のあたりは広範囲に水がたまっています。おそらく大島川上流で発生した土石流が天竜川に押し出し、河道が狭まったことで、滞流が起こったのでしょう。為勝が「諏訪湖のように水がついている」と言った状況がそれです。

「未満水」の信頼できる史料を丁寧に読んでいくと、今から300年前のこの水害は、想像するより遙

かに狭い範囲で起こっているということがわかります。南は南大島川くらい、北は中田切川くらいの間にもものすごく大きな被害が出た災害だったと思われます。

10 「未満水」の被害発生時間

災害が起こっている時間帯を考えて見ます。「水害記」にあるように、18日の未明からの「膝を突き合わせても声が聞こえない」というような豪雨が災害を引き起こした直接的な要因です。はっきりはわかりませんが、おそらく数時間降り続いたのだらうと思います。境之川や田沢川での土石流の発生は、当日午後だと考えられます。

ここが大切だと思います。つまり、「未曾有」といわれるような災害は、わずか数時間の激しい雨で発生しているということです。しかも、それが極めて局地的な場所での出来事です。

「膝を突き合わせて聞こえないほどの雨」と言うのは、気象用語でいうと、大体、1時間に20ミリくらいの降雨です。ということで、推定ですけれども、時間雨量20ミリぐらいの雨が数時間、天竜川西側の狭い範囲に降り続くことで、様々な支流が軒並み氾濫していったのではないかと思います。(ただ、大島川の上流が土石流を起こしたのは、19日日中の天竜川の水位の変化から見て、18日ではなくて19日だと思っています。)

正徳5年の6月18日、為勝と一緒に田沢川の川岸に佇んでみましょう(もちろんものすごい雨なのでそんなことは実際には出来ないのですが)。あえて18日の昼ごろに佇んでいると仮定しましょう。

何が見えたか。

「百とか千の雷が鳴るような音がして、座敷に居ても震えた、富士山の噴火よりも大きな音だった」という彼の感想を思い出しながら、何が見えたのか想像してみましょう。

おそらくこのような光景です。

(土石流の映像1)

為勝と一緒に立っていると、こういう土石流が旁らを通り過ぎていったのでしょうか。

松島信幸先生もお話になっていますし、「戌の満水」の時の小諸の史料にも書いてあるのですが、土石流の先端部では、巨石が屏風を立てたような姿に並んで流れ下ってきます。石が激しくぶつかりあって、水の中でも火花が散るのが見えるそうです。ピンポン玉みたいに巨石が宙に舞うという表現もあります。まさにその光景を為勝は見たのです。

もう一つ、この映像も参考になります。

(土石流の映像2)

これを見ていると、土石流というのは、単純に大量の水が流れてくるというものではないことがわかります。「鉄砲水」という表現もありますが、水ではなく、石や倒木がものすごい早さで流れ下る現象が土石流だということがわかります。土石流のことを先人は「山津波」と言ってきました。東日本大震災の時の、市内に押し寄せる津波のイメージを思い浮かべていただければ、山津波の様子や破壊力が想像できます。なぎ倒された木や石がものすごい早さで流れ下り、速度が上がれば上がるだけ破壊力を増し、下流の家や堤防を壊していくわけです。こういう土石流(「山津波」)が田沢川や大島川、南大島川などで発生したと考えられます。橋が落ち、交通も遮断されました。

もう一度、災害発生時間にもどりますと、このような被害が、山吹地域では、18日の午後に発生したと考えられます。それは、豪雨の発生からわずか数時間後のことでした。

11 「未満水」と三六災害

ここまで「未満水」のことを調べて来て、やっと三六災害と重ね合わせられるような気がしてきました。三六災害については、私より皆様の方が詳しいし、今回の美博の展示でも自然分野の村松さんが詳しく研究しています。私は又聞きですからいい加減なことしか言えませんが、今回私たち美博の職員が注目したのは、三六災害もきわめて短時間の降雨で発生した災害だったということです。「未満水」と実は非常によく似ている災害だったことを明らかにしたところが、今回の展示の成果でした。「未満水」のお話を離れて、少し詳しく三六災害を見てみたいと思います。

昭和 36 年 6 月下旬に発生した水害は、当地では「三六災害」と言いますが、実は全国各地で大きな被害が出ています。梅雨前線の停滞と、台風崩れの温帯低気圧が主因といわれますが、当地では 6 月 27 日から 28 日にかけて中小河川での土石流や大河川の氾濫が発生しました。

梅雨時の災害なので、「梅雨前線の停滞に伴う長雨が原因」というイメージを抱きがちですが、直前までは「から梅雨」で、雨が少ない状態が続いていました。今回、降雨状況と災害発生時間を調べ直したところ、6 月 27 日の半日ほどの間に降った激しい雨が原因で発生したことがわかりました。

「未満水」ととてもよく似た災害だったことが明らかになりました。

まず、9 ページの気象条件のところを見てください。昭和 36 年 6 月 27 日、いわゆる三六災害が発生した日の天気図ですけれども、梅雨前線の位置が「未満水」の時とほとんど同じです。気象条件はすごく似ています。

三六災害の時には温帯低気圧から流れ込む湿った空気（湿舌）が伊那谷に入り込んでいました。おそらく「未満水」の時もこの地域に向かって、大量の湿った空気が入って来たのでしょう。基本的には同じ気象条件だと思います。

ところで、みなさんは三六災害が発生した 6 月 27 日から 28 日にかけて、何をされていましたか。

時系列にそって少し詳しく見ていきましょう。

10 時半に注意報が出て、2 時ごろにはすでに田沢川や大島川で増水が起こり、夕方には滝の沢あたりで氾濫が起こっています。川路では人が亡くなっています。

三六災害というと、長雨のあとにまた雨が降って引き起こされた災害のようなイメージがありますが、実際には注意報が出てから人が亡くなるまでの時間はわずか 6 時間ぐらいしかないのです。災害本部が出来るころにはすでに死者が出ている。

「未満水」というのはそれに対して、高森地域を中心に、上伊那南部、天竜川竜西に大きな被害を生みました。三六災害と比較してみると、似ている部分が多い一方、被災地域が限定されているという意味で、随分異なる点もあることがわかります。

もう一度まとめると、「未満水」はきわめて局地的な場所に起こった災害で、きわめて短い時間に降った雨によって引き起こされている災害です。三六災害と気象はよく似ているけれども、雨が降った地域が広い狭いかという違いだったというふうに言えます。

共通点は梅雨前線の活発さです。1 時間雨量が 20～30 ミリ。三六災害も 1 時間に 30 ミリぐらいの雨が降っています。それから、雨が継続する時間も似ています。激しい雨は半日くらいではないかと思えます。

12 伊那谷の特色

ところで、こうした降雨が、なぜ当地ではこんなに大きな災害を発生させるのでしょうか。伊那谷の地質の脆さと複雑な地形に原因があるように思えます。

今回、三六災害時の一時間ごとの降雨の場所・雨量の推移をグラフィック化してみたのですが、雨の降り方にかなりムラがあることに気づきました。局地的にすごい雨がバアッと降る場所がある。ところが、さほど離れていない場所ではその時、ほとんど雨が降っていないというような現象があちこちらで起こっています。山や谷が入り組む伊那谷の地形が、雨や風の動きを複雑にし、予測を難しくしているのではないかと思いました。

江戸時代の伊那谷では、「未満水」以外にも、「子（ね）満水」など、いくつも大きな洪水が発生していますが、たとえば「子満水」は竜東に大きな被害を出しました。喬木や豊丘などですが、これらの地域は「未満水」では被害が報告されていません。逆に、竜西では「子満水」の被害はほとんど報告されていません。雨の降り方の違いを精査してみる必要があります。

花崗岩等からなる伊那谷の地質が雨にもろいということはよく言われます。複雑な地形と地質。これは洪水対策だけでなく、地震対策でも留意すべきことでしょう。

一概に言えないのですが、局地的に起こる変化が予想しにくいのが伊那谷です。それだけしっかり情報を聞いて判断しなければいけないし、流れてくる情報を鵜呑みにしてもいけないということです。

災害時には、避難情報など、様々な情報が流れます。それは勿論重要ですが、地域ごとで起こることが違うということも踏まえ、「隣に習え」ではない行動をとることが必要だと思います。「未満水」あるいは三六災害を調べてみて、そういうことを痛感しました。

地域の歴史や実情をよく理解して、確実に自分たちが正しい情報を選んでいくことが必要でしょう。

最近とても怖いと感じるのは、スマホなどを使った災害情報の発信です。3.11の津波もそうですが、仮に、スマホを持っている人が、「おい、津波が来たからこっちへ逃げろ」という情報を流したとします。それが思いつきの情報だったらどうでしょう。

この情報を鵜呑みにして人が行動し、結果、津波に巻き込まれるということがあるかもしれない。

今、私たちはネット上で自由に情報を発信することができます。「雨が降っている。天竜川が危ないからこっちへ逃げろ」というような。

ただ、そういう情報を流してそれで人が動いて、結果としてその方々がなんらかの被害を受けるということは十分あるわけです。それは非常に怖いことです。

「三六災害 50 年」と「三六災害 60 年」の違いは、情報を私たちが選択して、それを責任もって発信する時代が到来したということだと思います。情報を扱う便利さと怖さ両方に囲まれて、私たちは今、生きているんだと思うんです。

13 私たちは、どこにいるのか

最後に、伊那谷に生きるということなのかなということ、もっと大きな視点で考えようと思います。二つグラフを用意しました。11 ページを見てください。

土砂災害が起こる危険な場所はどのくらいあるかという表です。鹿児島県と長野県の、土砂災害が起こる危険個所数を比べています。全国的には広島が一番多くて、長野県と鹿児島県は全国で真ん中くらい。ほとんど同数です。

ところが、実際に起こった土砂災害の発生件数はまったく違います。鹿児島は圧倒的に多く、長野は非常に少ないのです。土石流危険箇所はほぼ同数なのに、どうして鹿児島は長野県に比べてこんなに土砂災害が多いのか。

簡単に言うと、長野県は小雨地帯で、雨が少ないので、めったに災害が起こらないということなのです。

たとえば、鹿児島市の場合は年間 2,266 ミリで、飯田の場合は 2,000 ミリくらいです。少ないです。もっと少ないのは佐久ですが、全体に長野県は雨が少なくて、飯田もその一つです。私は北信に 8 年住んでいましたが、冬の北信は曇りでも、飯田は晴れているという時が多かったです。飯田では冬から春にかけてのころ、「日が濃くなる」という方言を使います。北信の人たちからは羨ましいといわれました。晴れている日が多いですね。

変な言い方ですが、適当に雨が降って、適当に流れているのがいいのです。土砂も適当に流されていくわけです。

ところが、何年もまとまった雨が降らずに、時々思い出したようにどーんと降るといった状況が怖いわけですね。もともと花崗岩のように水にもろい地層が多く、その上、雨で洗い流されなため何年も堆積した土がふわふわした絨毯のようになっている場所があらこちらにあります。大規模な降雨があれば、何年か分の堆積物が一挙に崩壊し、甚大な被害がでます。「雨に弱い伊那谷」という認識は重要です。

そのことをさらに深めていくために、「温暖化の進行」を取り上げましょう。

ゲリラ豪雨が毎年、どのくらい発生しているかを示したグラフがこれです。気象予報士の方から教えてもらいました。毎年の発生数は当然違うわけですが、全体の傾向としては、発生数は右肩上がりです。1 時間に 50 ミリを越えるようなゲリラ豪雨が、温暖化の進行とともに増えて来ていることがわかります。私たちだけでなく、私たちの子供達、孫達の時代が直面しなければならない課題です。

台風については、次のグラフのような情報が発表されています。現在と 21 世紀末の台風の規模・発生数を表したグラフです。

これを見ると、現在の台風の特徴は、小型の台風がたくさん発生していることがわかります。

一方、21 世紀末ごろはどうでしょう。小型の台風の発生数は減ります。その代わりに大型の台風の襲来数が増えます。今から 80 年ほど先のことです。

つまり、21 世紀末に向けて、私たちをとりまく気象は、ゲリラ豪雨の数が増えていくと同時に、台風の規模も大きくなっていくということです。

災害の問題は、私たちが生きている時代だけでなく、子どもたち、あるいは孫たちの時代までを視野にいれて考えなければいけないわけです。私たちがいいからよいのではなく、もっと長いスパンで考える必要があります。座光寺為勝の「水害記」から 300 年たちました。この史料からたくさんの示唆を与えられました。今から 300 年後の人たちに、役に立つものを手渡して行かなければなりません。

今日、大きく新聞に取り上げられていましたが、線状降水帯というのが最近、何度か発生しています。たとえば 2015 年の 9 月 9 日、鬼怒川で大きな被害を出したのは線状降水帯でした。

(当時の雨雲レーダーの画像を見ながら)

ここに線状降水帯が発生して、その結果として一カ所に長い時間にわたって雨が降り続けました。次々々と雲が湧き上がって雨域が移動しない。これが仮に 100 キロ～200 キロ、南西にずれて発生していたら、伊那谷の付近に甚大な被害が発生していたはずですね。

線状降水帯が発生するメカニズムはだんだん分かって来たようですが、どこでいつ発生するかを正確に予測することは難しいと言われてしています。

14 「藩」を越えて

近世の洪水から何を学ぶかというのは、後ほど述べることにして、ちょっと違う視点でお話したいことがあります。なんで「未満水」はこんなに史料が少ないのかということです。

実は「戌の満水」もそうですが、近世の災害は、なかなか全体像が復元できないものです。なぜ復元出来ないと思われませんか。

「昔だから記録がない」からではないのです。一つひとつの藩が、みんな独立国家みたいに自分たちだけで情報を集め、自分たちだけの基準で記録を作っているからなのです。藩とか旗本によって、記録する基準が違ったり、記録に濃淡があるから、全体像が見えてきません。みんな独立国家みたいに自分のことしか考えてないから、全体が復元できないのです。

江戸時代の飯田下伊那の所領の分布図を見てください。この地域の特色というのは、飯田藩ですら少しの面積しかなくて、知久とか座光寺などの旗本の所領が入り組み、さらに大名の飛び地も作られています。まさに虫食い状態。さらに幕府の土地（天領）もあります。飯田下伊那のわずかな土地にたくさんの人や勢力が関わっています。

結局、統一したデータがとれないという状態が長いこと続くことになりました。

ところで、今、みなさんはこれを見ながら「江戸時代は大変だよな。今はそんなことがなくていい」と思われるでしょう。でも本当でしょうか。

現代の日本は、日本各地で共通の形式のデータが作られ、集められて、統一した行政運営が出来ているのでしょうか。そんなことはないですよ。高森は高森、喬木は喬木、豊丘は豊丘っていうような、役所ごとの縦割り行政の弊害は今も指摘されています。

コロナ対応でも、ワクチンの接種だとか PCR 検査がなかなか進まない要因は、縦割り行政だからだといわれています。戦前とあまり変わらない状態で、この国は本当に先進国なのかという厳しい批判も出されました。

改めて皆さんにお聞きします。私たちの目の前にあるものは何でしょう。

あるのは伊那谷とか天竜川だけです。村とか町という単位は、人間が便宜的に作った区画に過ぎません。災害も、主因は自然現象です。自然現象側に行政区画を考慮する気持ちなどあるはずはありません。災害にとっては、市も町も村も関係ないのです。その事をあらためて考えてみたいと思います。

2019年の台風19号で明らかになったことの一つは、「千曲川という川は上流から下流まで一本の川だった」という当たり前の事実の発見です。上流で雨が大量に降れば、やがて下流で氾濫が起こるといふ当たり前のことが見失われていました。研究者も自治体の職員も、自分の目に見える範囲の「川」しか考えていなかったのです。

下流では雨が大量に降っていないので大丈夫だと思っていたら、上流で大変な雨が降って、結局、下流で大氾濫が起こりました。19号台風被害のあと、「流域治水」という言葉が使われるようになりました。やっと「川は一本。上流も下流も運命共同体。一緒に災害を考えよう」という発想がでてきました。喬木であろうが高森であろうが関係なく、一本の川の中に命を預けながら生きている私たちの生活があるだけなのです。

村とか町とかは便宜的に人間が作ったものであって、それを乗り越えて川は流れるし、それを乗り越えて雨は降るわけです。私が今、とても気になるのは、「専門」とか「専門外」とかいう言葉が、まだ平気でまかり通っていることです。そうした言葉は、時に、責任回避のための言い訳として使われています。

座光寺為勝の記録（「水害記」）がなかったら、今日私は、ほぼ100%はなにもしゃべれませんでした。「記録する」という行為は、今生きている自分たちのためではなく、まだ見ぬこれからの世代のための行為だと思います。われわれの子どもたちや孫たちやもっと次の代までもが、もっと言えば動物も生き物もみんなが安全な明日を生きるための欠かせない営みなのです。

15 「水」は敵なのか

洪水が起こると、やっとなんか築きあげてきた生活を一瞬で破壊していく水流（「水」）に憎しみを感ずります。「水」に対する恐怖心も生まれてきます。

ただ、冷静に考えれば、洪水が去れば、ただちに飲料水や、トイレなどの生活用水が必要になります。私たちの生活は、水なくしては片時も成り立ちません。川も同じです。ひとたび洪水が起これば、川は凶器ですが、川のない生活もまた、あり得ません。

座光寺為勝の「水害記」を読んでいて「何故だろう」と思っていたのは、用水路の被害がたいへん多く記載されていることでした。でも、考えて見れば、洪水が終われば、人々は荒廃した田や畑に水を引き、種を蒔き、作物を育てなければならないのです。「水とともに生きる」、それが私たちの生活です。「水」は時に凶器にもなりますが、私たちの生活はやはり、「水とともにある」ということを、為勝から教わりました。

「数十年に一度の降水量」という言葉がしばしば使われます。ただ、一年間に降る雨の量はそれほど増減するはずはありませんから、豪雨の時期があれば、雨が降らない時期も生まれるということではないでしょうか。ここ2年、冬に雪が降りません。果樹や農作業に影響がでていると聞きます。

穏やかに雨が降り、地中にしみこみ、時間をかけて湧き出してくる。そんな時間差がなく、一気に水が流れ下る様子を見ていると、恐ろしくなります。

「想定外の降雨」は「想定外の渇水」でもあります。

「蛇口をひねれば水がでる」、それが当たり前でなくなる日が近いかもしれません。

おわりに

最後に手塚治虫の「火の鳥」という作品の中の言葉をご紹介します。私のとても好きな言葉です。

「人間は明日生きるために今日を生きてきた」。

人間が学ぶということの原点がこの中にあると思います。

明日、自分が生きるために「未満水」を知ることがプラスになるかどうか、それは分かりません。

ただ明日を作るためには、自分や社会に欠けているものを取り込まなくてはいけない。もっともっと遠い明日の為にも、それは必要なことなのだ、ということはこの言葉は示しています。

「専門」、「専門外」ではなくて、あるのは「命をどう安全に明日へ、将来へつなげるか」です。

為勝さんは300年先の僕らに災害の教訓を手渡したと考えてもよいわけです。そういう長いスタンスで命を見つめることが、災害を考える視点だと思います。

「未満水」という災害は、今日発生している災害と比べ大した内容ではないかもしれませんが。もしかしたら、世上言われているほど被害は小さかったかもしれません。

ただ、そういう災害に遭った時に人間が何をしたのか。どんな人がいたのか。それから、それは今、僕たちに何を伝えてくれているのか、この講座をきっかけに考えていただければと思います。

さて最後に復習を兼ねながら、新しいことを一言お話します。

「未満水」と三六災害の調査を通じて考えたことは、伊那谷の場合にはどこでどんな雨が降るか、災害が起こるかということが予想しにくいということです。局地性を持っているということです。喬木は大丈夫な時に高森は大変というようなことがたくさんある地形であり、気象だと思います。

ということは、狭い地域の情報にこだわったほうがいいということです。地形とか、歴史とか、気象に関することわざです。大きなレベル・範囲で「風がこっちに吹くとどうだ」とかだけではなくて、「うちの村のこの地域、大字くらいの範囲」というレベルで、雲の動きや、川の水位に注意をすることです。

大変狭い地域の中で昔から言い伝えられてきたことわざなどを、一度ちゃんと掘り起こし、記録して置かなければいけないと思います。どんどん高齢者が増えて、どんどん記憶が消えていってしまいます。そういう記憶の一つが小さな地域の中の言い伝えです。必ず役に立つと思います。

おじいちゃんおばあちゃんは、もっともっと大きな顔をして、昔のことを喋らなきゃいけないのです。「歳を食ってすみません」ではいけないのです。長く伝えられてきた暮らしの知恵を知る人たちが、まだまだ活躍しなければいけない場面がいっぱいあります。

というわけで改めて今日の講座、私がこのように喋らせてもらったのは、すべて座光寺為勝さんのおかげです。為勝さんが残してくれたものがあってから頑張れたと思います。

ありがとうございました。

